

## 2. 留学生・海外留学相談部門

留学生・海外留学相談部門の活動対象は、1) 一橋大学に在籍する留学生、2) 留学生の支援や交流を希望する日本人学生、3) 留学を希望する日本人学生、及び 4) 留学生の問題を解決するために連携する教職員等である。2015 年度の留学生・海外留学相談部門の業務は、国際教育センター相談部門教員（阿部仁）、国際教育センター兼務で各研究科に所属する留学生専門教育教員（商学研究科：渡部由紀、経済学研究科：奇春花、法学研究科：新見有紀子、社会学研究科：産休につき不在）、国際課に所属する留学生アドバイザー（五嶋春奈）および社会学研究科に所属する留学生アドバイザー（小林安可里）が担当した。

留学生・海外留学相談部門の教員は国際教育分野における学生相談及び学生支援に携わっている。これらの業務は 1) 外国人留学生の相談に応じ、問題解決を図る「留学生生活相談」と、派遣留学や短期海外研修参加のプランニングを支援する「海外留学相談」、2) 外国人留学生の適応上の問題を未然に防ぎ、学内での異文化理解の認識を高める「オリエンテーション・留学生教育支援」、3) 本学学生の留学を促す「海外留学の推進」、及び 4) 海外留学や国際教育交流の理解を深める「授業の提供」の 4 つに分けられる。

「留学生生活相談・海外留学相談」とは学生との一対一のアドバイジングであり、問題解決から情報提供まで幅広い活動が含まれる。「オリエンテーション・国際交流支援」には、1) オリエンテーション・プログラムの提供やガイドブックの出版、2) 外国人留学生向け個別チューターの運営、3) 留学生と日本人学生向けのランゲージ・コミュニティの運営、4) 国際資料室と日本語指導チュータープログラムの運営、5) 探訪旅行など留学生の日本社会や文化への理解を促す活動などがある。「海外留学の推進」には、1) 学内留学フェアへの運営参加、2) 派遣留学生向け渡航前オリエンテーション、3) 「短期海外研修：国境・文化を超える能力育成プログラム」（オーストラリア、中国、韓国、スペイン企業派遣）の実施などがある。また、相談室の教員が提供した授業には、学部生向けの全学共通教育科目及び国際交流科目（「4. 授業の提供」を参照）がある。

### 1. 留学生生活相談と海外留学相談

#### 1) 相談室の開室日程及び担当者

学期中の相談室開室日は、夏学期は 2015 年 3 月 30 日（月）～7 月 30 日（木）、冬学期は 2015 年 9 月 28 日（月）～2016 年 2 月 3 日（水）であった。開室時間は概ね月曜日～金曜日の午前 10 時～午後 1 時、午後 2 時～午後 5 時で、表 1 の担当表に基づいた相談員が各曜日を担当した。夏期休業期間の 7 月 31 日（金）～9 月 25 日（金）及び春期休業期間の 2016 年 2 月 4 日（木）～4 月 1 日（金）は午前 10 時～午後 1 時で開室したが、相談員の担当制度は、表 1 の曜日ごとの担当者制ではなく、相談員 1 名が必ず在室することを優先した柔軟な交代制とした。

表1 相談室担当者の一覧 (2015年度)

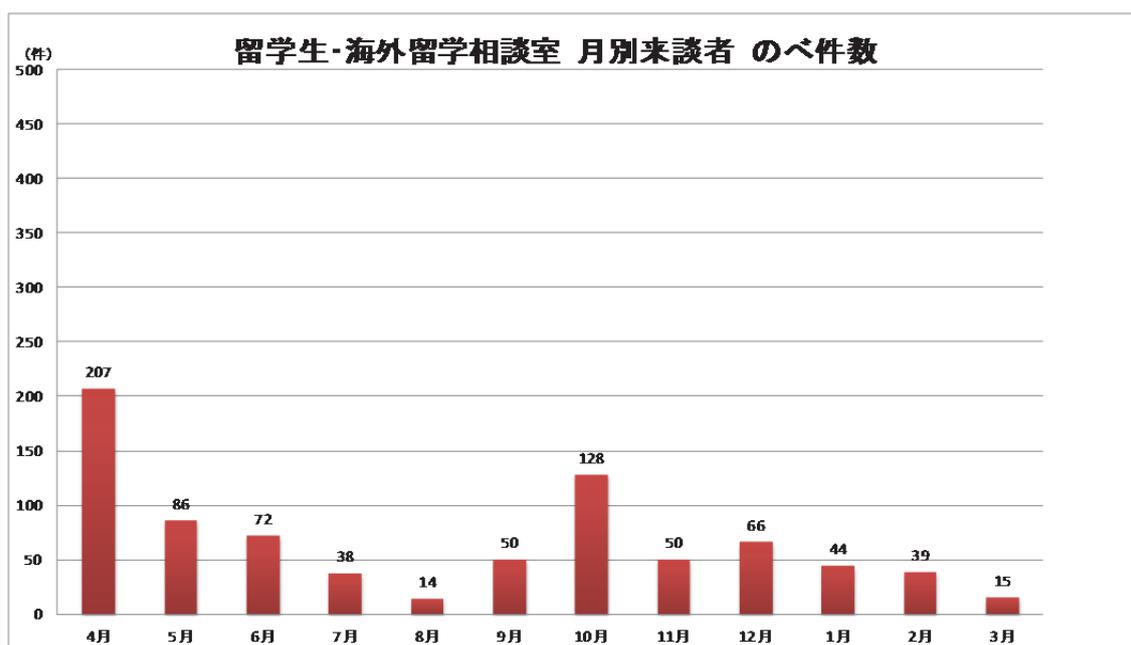
曜日	留学生相談室 (10-13、14-17時)	海外留学相談コーナー (10-13、14-17時)
月	奇 春花	阿部 仁
火	新見 有紀子	五嶋 春奈
水	小林 安可里	閉室
木	五嶋 春奈	留学生相談室にて対応
金	渡部 由紀	五嶋 春奈

## 2) 相談状況の分類

### ① 相談件数と領域

図1は2015年度の月別相談件数、表2は相談内容別件数と割合である。1年間で809件(昨年度877件)の相談を受け付けた。相談件数は前年より68件減少したものの、例年通り4月と10月の相談のピーク時には、1カ月に207件と128件の相談があった。

図1 2015年度月別相談件数



2015年度に件数が一番多かった相談内容は、「海外留学相談」(310件、昨年度331件)であった。昨年度に比べて相談件数が微減したものの、年間300件以上の相談があり、本学学生の留学相談のニーズは依然として高い。非定型な留学相談は一人あたりの相談時間が40分から50分程かかることが多いため、学期中は国際研究館一階にある国際資料室に「海外留学相談コーナー」を設けて対応した。

## 2. 留学生・海外留学相談部門

海外留学相談の領域に含まれるものとして、短期海外研修（14件、昨年度27件）や「海外留学と国際教育交流」の授業などに関する教育内容の相談（20件、昨年度5件）がある。これら3つの相談内容を合わせると、2015年度の海外留学関連の相談件数は344件にのぼり、全相談件数の43%（昨年度は41%）を占めた。留学生・海外留学部門となる前年の2009年度においては、留学関連来談者数の割合は全体の12%前後だったことを省みれば、海外留学相談業務が本相談室の基幹業務として定着したことを表している。

表2 2015年度 相談内容別来談者状況

相談内容	件数	%
留学相談	310	38.3%
チューター	127	15.7%
チューター・オリエンテーション	122	15.1%
健康（心理）	31	3.8%
宿舎・住居	28	3.5%
生活・適応	26	3.2%
教育内容	25	3.1%
推薦状	20	2.5%
履修	20	2.5%
在留資格	18	2.2%
その他	17	2.1%
短期海外研修	14	1.7%
LC（ランゲージ・コミュニティ）	10	1.2%
奨学金	9	1.1%
会議	5	0.6%
進学	5	0.6%
減免	4	0.5%
サークル	4	0.5%
就職・進路	4	0.5%
行事	3	0.4%
人間関係	3	0.4%
健康（身体）	2	0.2%
アルバイト	1	0.1%
オリエンテーション	1	0.1%
<b>合計</b>	<b>809</b>	<b>100%</b>

次に多かった相談領域は留学生の学習、語学支援に関わる活動である「チューター・オリエンテーション」、「チューター」及び「ランゲージ・コミュニティ」である。これらのプログラムは留学生の学習支援のみならず、日本人学生が外国人留学生と交流し国際感

覚を育成できる機会でもある。留学相談に次いで多かった「チューター」(127件、昨年度169件)と3番目に多い「チューター・オリエンテーション」(122件、昨年度143件)を含め、チューター制度に関する相談が全体の36%を占めている。チューター・オリエンテーションでは、チューター候補者と留学生の両者を共に相談室に呼び、チュートリアルの内容の確認、チュートリアル実施にあたっての注意事項、問題が起きた場合の対処などについて指導している。これは、チューター制度の有効性を高め、日本人学生と留学生のトラブルを防止することを目的としている。また、国費研究生や日本語日本文化研修留学生を受け持つチューターについては、この種の留学生の留学目的の一つが学術的な日本語力の向上にあるため、日本語教育の訓練を受けている、もしくは日本語教育歴のある学生にチューターを依頼し、留学生の学習ニーズに適したチューターとのマッチアップに努めた。チューターが不足しがちな研究科にかぎっては、上級生の留学生をチューターとして採用することにより、この問題に対応した。

その次に多かった相談領域は経済面に関する相談で、以下のように下位分類される。奨学金申請のための「推薦状」(20件、昨年度24件)、国際学生宿舎や交流会館への入退寮に関する宿舎・住居(28件、昨年度18件)、授業料の減免申請のための証明を求める「減免」(4件、昨年度13件)、そして奨学金相談などの「奨学金」(9件、昨年度5件)がある。奨学金に関するものでも推薦書を実際に行った場合には、「推薦状」として分類している。「アルバイト」に関する相談は、1件(昨年度2件)であった。経済面に関係する来談件数を合計すると62件(昨年度62件)となる。経済面に関する相談内容は生活設計の建て直し、アルバイトや奨学金紹介などになるが、解決は難しいものが多い。心理的に追いつめられていることが多いので、話を聞いていくことでそれでも何とかやっついこうという気持ちをもってもらうことが大切である。この種の相談では、多くの場合、どうして私は減免や奨学金がもらえないのかという制度や審査に対する不満があり、時間をかけて学生の相談に乗る姿勢が求められる。

「ランゲージ・コミュニティ」(10件、昨年度34件)は、主に外国人留学生と日本人学生による相互語学学習への登録申込や学生が自発的に語学学習パートナーを見つけるためのイベント運営である。従来のパートナー方式から、イベント交流を通じて語学学習パートナーを見つけるフォーマットに変更したため、マッチングに必要となる個別相談が減少した。特に、日本語会話力の向上に関心のある交換留学生にランゲージ・コミュニティを利用してもらうことにより、チューター制度の本来の設立目的である「日本語による授業履修支援」のために数少ない日本人チューターを研究生及び正規留学生向けに振り分けることが可能となる。

その他の相談領域としては、心理的な問題(31件、昨年度11件)、身体的な問題(2件、昨年度1件)がある。これらは他の項目と比べると複数回の来談及び長時間を要するケースが多く関係部門との連携において相談室が管制塔的な役割を果たすケースが多い。

## ② 来談者別内訳

表3 来談者の内訳

来談者		件数	%
留学生		363	44.9%
(内訳)			
学部生	83		
修士課程	164		
博士課程	26		
研究生	46		
日研究生	0		
交流学生	2		
その他	38		
日本人学生		370	45.7%
(内訳)			
学部生	320		
修士課程	38		
博士課程	9		
その他	3		
教員		19	2.3%
職員		23	2.8%
外部		15	1.9%
地域		1	0.1%
その他		18	2.2%
総計		809	100%

表3にある全来談者のうち、日本人学生の相談は370件（全体の45.7%、昨年度411件/46.9%）、留学生による相談は363件（同44.9%、昨年度は395件/45.0%）、教員は19件（同2.3%、昨年度11件/1.6%）、職員は23件（同2.8%、昨年度29件/2.3%）であった。

日本人学生の来談者数（370件）は昨年度（411件）より減少したものの、相談件数中の割合としては昨年度と同じ割合で推移した。相談件数のうち8割は学部生によるもので留学相談について来室した学生に学部生が多いことが特徴である。

一方、留学生の来談者は363件（昨年度395件）で、こちらもやや減少したものの、相談件数中の割合としては昨年度と同じ割合で推移した。このうち83件（21%）が学部生である。学部生の相談内容の特徴としては、1～2年次は指導教員がいないので奨学金などについての推薦を求めて来室すること等があげられる。

修士課程の留学生の来談は164件と留学生相談の45%を占める。修士課程の学生数が増加し奨学金の受給が難しくなって経済的な問題を抱える学生が少なくない。経済的に厳

しい中で、単位の取得、修士論文の執筆、卒業後の進路と数多くの問題に直面することがある。研究生の相談件数は46件であった。修士課程や博士課程の入学準備中である研究生の訴える問題は深刻なものが多い。

交流学生の生活相談は2件と、昨年度(32件)から著しく減少した。交換留学生の学部科目の履修指導は指導教員や学部教育教員、日本語授業の指導は日本語教員、生活相談は留学生教育教員、HGPの履修相談は交流科目部門や国際課という役割分担を関連部門が共通に認識して臨んだため、交流学生自身が状況に応じて的確に相談相手を選んでいることが伺える。

## 2. オリエンテーション・留学生教育支援

### 1) 新入外国人留学生オリエンテーション・プログラム

2015年4月及び10月入学の大学院生、学部生、研究生、交流学生を対象に留学生オリエンテーションを行った。夏学期入学生のオリエンテーションは入学式前の3月30日と31日に開催され、学部生、院生、研究生、交流学生を含めた175名が出席した(欠席21名)。冬学期入学生のオリエンテーションは9月23日から25日に開催され、大学院生、研究生、交流学生ら計117名が出席した(欠席3名)。なお、留学生オリエンテーションに出席できなかった留学生については留学生相談室で個別にオリエンテーションを実施した。研究生と交流学生には英語によるオリエンテーションを実施した。

### 2) 外国人留学生向け個別チューター制度の運営

外国人留学生向け個別チューター制度には、一般チューター制度と論文チューター制度とがある。一般チューター制度とは、入学して間もない留学生(学部生や大学院生、研究生、また一部交流学生も対象)が日本語で円滑に専門科目の学習・研究を進められるよう、入学後1年間に限り日本人学生とペアになって勉学上のサポートを受けられる制度である。また後者の論文チューター制度は、修士論文や博士論文を執筆している大学院課程の留学生を対象とするもので、論文提出前の2ヶ月間に限り論文の日本語や構成のチェックを受けることができる制度である。

両制度とも留学生自身がチューター候補者を探しペアを組むことが基本であるが、候補者が見つからない留学生に対しては、相談室でもチューター志望の日本人学生を募集し、留学生に紹介できるような仕組みを整えている。一般チューター制度の利用状況を見てみると学部生より院生の利用が圧倒的に多いが、研究科や専門分野によってはチューター志望の日本人院生が不足しており、チューター候補者が見つからず相談に訪れる大学院留学生が多い。需要と供給のバランスをとるために、日本人院生へのチューター制度の周知を工夫し、数年にわたり継続的にチューターを確保し、次年度以降も別の留学生を担当してもらえるよう名簿管理方法を変更した。また今後は、留学生のニーズを調査・把握し、国

際資料室の日本語指導チューター（(4)を参照）の効果的な運営とも合わせて検討していく必要があるだろう。

### 3) ランゲージ・コミュニティ

一橋大学ランゲージ・コミュニティ（Language Community : LC）とは、一橋大学の外国人留学生と日本人学生とが相互に語学を勉強しあうことと異文化交流を目的とした活動である。2010年の活動開始から、今年度で6年目を迎えた。今年度はLCを担当する経済学研究科講師・奇春花と、学生コーディネーター5名（2015年9月までは、法学研究科博士課程3年・濱田マリアナ、社会学部2年・渡部円馨；2015年10月～現在は、経済学部2年・溝渕達也、商学部2年・曾毅春、社会学部1年・竹内英実香）がその運営と管理を担当した。学生コーディネーターは、今年度も日本人学生と留学生の組み合わせで構成し、参加者の希望に適したサポートが提供できるよう工夫されている。2014年の10月から、従来の登録制ランゲージ・コミュニティを毎週水曜日のお昼の時間（12：15-13：15）に行われるイベント型に変更し、参加者がいくつかのグループに分かれて日本語かその他の言語で自由に話し合うスタイルになった。運営方法を変えることによってより多くの学生に日本語と外国語で話す機会が提供できるようになった。また、2015年10月からは学生コーディネーターが3人体制になり、より多様な形でイベントが提供できた。2015年度は計27回のLCと3回のLC特別企画（スポーツ大会、クリスマスイベント、書初め）が行われ、延べ368名の外国人留学生と日本人学生が参加した（表4）。LCの参加者の中にはその後も自主的に交流を続けたり、言語交換パートナーになったりする学生が多数いた。今後も運営方法について試行錯誤しながら改善していき、より多い学生に異文化交流と言語を学ぶ機会を提供したい。

表4 LC参加人数

	開催回数	留学生	日本人学生	計
LC（毎週水曜日）	27回	172名	115名	287名
LC特別企画	3回	44名	37名	81名
計	30回	216名	152名	368名

### 4) 国際資料室と日本語指導チュータープログラムの運営

個別チューターとは別に全ての留学生が気軽に日本語の文章添削依頼や発表資料についての相談などができるように、国際研究館1階の国際資料室にチューターが常駐している。チューターは大学院の学生に依頼し、月曜日～金曜日の午前10時～午後1時、午後2時～午後5時まで、外国人留学生にライティング・サポートを提供した。担当者の一覧を表5に示す。

表5 国際資料室担当者一覧 (2016年3月現在)

曜日	氏名・所属
月	正清 健介 (言語社会研究科博士課程)
火	松浦 加奈子 (社会学研究科博士課程)
水	船橋 諒 (商学研究科修士課程)
木	川田 幸生 (社会学研究科博士課程)
金	井上 慶太 (商学研究科博士課程)

## 5) 留学生日本探訪旅行

日本の文化、歴史、伝統及び自然を多角的に学ぶことを目的として、2015年8月4日～5日(1泊2日)に、栃木県の日光・鬼怒川を訪問するバス旅行を実施した。参加者は、留学生23名、日本人学生2名、引率者として新見(法学研究科)、国際課職員の豊田、松島が参加した。2013年2月以来、留学生のみならず日本人学生の参加枠も一定数設け、留学生と日本人学生の交流の場としてこの日本探訪旅行を位置づけて実施しているが、2015年度は日本人学生の参加希望者が今までで一番少なくなった。交流は仕掛け無しでは発生しにくいとの反省から、2016年度は日本人学生との交流に積極的な交流学生と外国人留学生との交流に積極的な日本人学生が、探訪旅行の企画から実施まで参画するスタイルに変更する。留学生・海外留学相談部門の教員が夏学期に開講している「Explore Japan Seminar」と「留学生理解と国際教育交流」が一部合同授業で共同企画を行い、両授業履修者を中心とする日本人と留学生に加え一般の外国人留学生を対象に探訪旅行の募集を行う。

## 3. 海外留学の推進

交換留学プログラムにて派遣された本学学生の数は増加傾向にある。短期海外研修の参加人数は安定して推移していたが、2013年度に始まったモニター留学制度の影響を受けたためか、オーストラリア方面への短期留学人数は20名以下にとどまっている。中国、韓国方面の参加人数は、緊張状態がやや改善されてきた日中韓関係を反映してか、例年に近い参加者が集まった(表6)。

表6 留学生・海外留学相談部門が関わる海外留学プログラムの派遣学生数の推移(単位・人)

派遣年度	2008	2009	2010	2011	2012	2013	2014	2015
交換留学(派遣数)	32	23	36	52	71	63	74	96
短期:オーストラリア	29	24	18	25	26	20	12	17
短期:中国	15	12	6	8	7	6	2	8
短期:スペイン	10	6	6	6	6	6	6	6
短期:韓国	--	6	6	6	5	5	3	4
合計	86	71	72	97	115	107	97	131

## 2. 留学生・海外留学相談部門

### 1) 学内留学フェアへの運営参加

海外留学希望者へのガイダンス及び協定校紹介を目的とした一橋大学主催の留学フェアは4月23日（水）に学内において開催され（参加者数 153 名）、相談室教職員は主に第二部（分科会）の運営に参加した。ここでは各ブースに分かれての説明会が行われ、学生交流協定校のほか、一橋大学国際課主催の「短期海外研修」であるオーストラリア・モナシユ大学、中国・北京大学、韓国・西江大学、スペイン企業研修などの情報提供が行われた。相談室の教職員は参加者に対し海外留学相談を行った。

秋学期には、学生により早く留学準備を開始してもらうことを目的としてブース出展形式による留学説明会を9月25日（金）にも開催し、国際課と国際教育センターが参画した（参加者数 42 名）。相談室教職員は参加学生に対し海外留学相談を行った。秋学期の説明会には派遣留学に選抜されなかった学生が多く参加したため、英語圏を中心に自費留学の相談が集中した。これらの学生に対しては本学と奨学金の提携がある大学（Western Michigan 大学）や外部の留学ネットワーク機構を紹介した。

### 2) 派遣留学生向け渡航前オリエンテーション

渡航前オリエンテーションとして、新たな環境に適応するための柔軟的思考を習得することを目的とした「異文化適応オリエンテーション」を実施した。ここでは、派遣先での異文化との遭遇と適応において重要となる心的プロセスの理解や、適応のスキルアップに繋がるヒントを提示することを目的とし、具体的には、仮想的に作り出した異文化空間で異文化との遭遇を体感してもらうアクティビティ（Albatross）や、2つの異なる文化を持つグループ間での異文化接触を仮想体験するアクティビティ（Bafabafa）などを織り交ぜたオリエンテーションを実施した。半年ないし一年の留学生生活を長期的視点で捉えた場合の環境適応について、その傾向や現実的な対処方法を紹介するほか、いつもとは異なる場面や環境に遭遇した際、その状況・状態把握に伴う心的なプロセスをできるだけ客観的に捉え、意識的かつ柔軟的思考をもってそれらと向き合うトレーニングを行うなど、派遣先でのパフォーマンスに役立つ情報を提供した（表 7）。冬出発向けの渡航前オリエンテーションでは、危機管理と事務手続きに関するオリエンテーションも同日に実施した。やむなき理由で異文化適応オリエンテーションを欠席した学生にはオリエンテーション内容に沿った課題に基づき、欠席者全員からレポートが提出された。

表 7 渡航前オリエンテーション実施状況

	実施日・期間	参加学生数
異文化オリエンテーション（夏出発向け）	2015年 6月17日	61名
異文化オリエンテーション（冬出発向け）	2015年11月 7日	14名

### 3) 短期海外研修 (オーストラリア・モナシュ大学、中国・北京大学、スペイン・ベルヘ社、韓国・西江大学)

短期海外研修プログラムは異文化における政治経済、環境、ビジネス課題に触れる過程で多角的な視点を身につけ、また「アウェーで実力を発揮できる自信」を体得することを目的としたプログラムであり、一橋大学派遣留学制度の前段階及び後段階として、本学の学生が海外留学を体系的、段階的に経験できる仕組みの一部を担っている。

まず、オーストラリアのモナシュ大学における短期海外研修については、2016年2月20日に成田空港を出発してから3月20日に帰国するまでの約4週間の日程で行われた。今年度も法学研究科講師・新見有紀子が研修の担当教員を務めた。例年通り現地での研修全般に関わる手配と調整は Monash University English Language Centre (MUELC) が行った。2月末から3月初旬にかけて新見が現地研修視察を行った。また、国際教育交換協議会 (CIEE) 日本代表部にも、2015年9月以降に開催された説明会や講義等、現地での研修前から協力していただいた。研修実施先のモナシュ大学のスタッフの方々の尽力のもと、コンソーシアムプログラムは毎年改良され、発展してきた。当該コンソーシアムプログラム開始から11年目となる今年度の参加大学は、お茶の水女子大学、埼玉大学、東京学芸大学、名古屋大学、大阪大学、九州大学、東京工業大学の7校だった。本学からは17名の学生が参加し、コンソーシアム全体としては155名が参加した。本研修は学部の1、2年生を対象として推奨しているが、今年は、就職前に海外留学経験を積みたいという学部4年生と3年生が1名ずつ参加した。また、一橋大学に留学している学部正規留学生も1名参加し、自らの国際性に磨きをかけていた。学生たちは語学研修とホームステイ、現地でのフィールドトリップ、現地で日本語を学んでいる学生との交流などを通じて、国際的な経験を積むとともに、貴重な学びの機会を得られた。一橋大学の教務課を主体として実施されてきたモニター留学が今年度から英語Ⅱ・Ⅲとして提供されるようになったが、それらと対比させることでモナシュ大学における当該短期海外研修の意義を改めて問い直し、その特性を打ち出して行く必要がある。一橋大学からの短期派遣留学を増加させていくという方針の中、本取り組みを通じて積み重ねてきた経験や、実績等を引き続き貴重な資源として、留学支援制度のさらなる発展につなげていきたい。

中国・北京大学における短期海外研修は、海外事務所である中国交流センター及び教育旅行エージェントの毎日エデュケーションの企画・協力のもと、2016年2月21日～3月20日の約4週間の日程で実施された。担当教員は、経済学研究科講師・奇春花である。今年度は学部生8名が参加し、北京大学での4週間の中国語クラス(すべて午前中)を柱に、午後は北京大学学生によるチューター補講、中国人家庭訪問、その他さまざまなアクティビティに参加した。中でも、本学独自の企画である北京駐在如水会OBによる交流会は今年度も非常に有意義な企画となった。帰国後、中国語の継続的な学習や長期留学へ

## 2. 留学生・海外留学相談部門

の関心を示す学生もいたことは、当該研修の一つの成果と言えるだろう。今後もより一層充実した研修を提供したい。

短期海外研修（スペイン企業派遣）はマドリッドに拠点を置く総合商社ベルヘ社と、一橋大学、韓国中央大学の三者運営による企業派遣プログラムで、本学におけるプログラム運営は国際教育センター教員の阿部仁が担当した。2015年度は冬季休業期間に6名の学部生が参加し、韓国中央大学の学生4名と一緒に5週間にわたる企業実習、マネジメント研修、スペイン語研修、在マドリッド日本大使館訪問などを通じ、国際ビジネス環境において「アウェーで実力を発揮できる自信」を体得すると同時に、日韓学生交流を通じて相互理解を深めた。

また、短期海外研修（韓国）は2016年2月29日～3月25日の4週間の日程で実施され、学部生4名が参加した。研修は、オリエンテーション、危機管理等を含む事前授業、韓国での一橋大学独自研修（1週間）と西江大学による韓国語・韓国学を学ぶ特別短期プログラム（3週間）の現地研修、そして、研修後の報告会と報告書作成からなる。事前授業では、韓国についての理解を深める講義、現地でのインタビュー調査の準備、そして、研修後の報告書作成のための準備を行った。一橋大学独自研修（西江大学での研修が始まる1週間前にソウル入りし、一橋大学の学生だけで文化体験・一橋大学同窓会組織訪問等を行う）は、商学研究科講師・渡部由紀が引率し、世界遺産の水原華城をはじめ、青瓦台、板門店・DMZ、独立記念館、西大門刑務所博物館などを訪問した。また、同窓会組織である如水会ソウル支部、韓国総同窓会のそれぞれの関連企業を訪問し座談会及び懇親会を実施するなど、学生がグローバルな視点で将来を考える機会を提供する一方、現役学生と同窓会組織の交流に取り組んだ。西江大学の3週間の研修では、少人数での会話を中心とした韓国語教育、西江大学教員による日本語での韓国学（政治、経済、社会、文化等）に加え、学生間の交流、韓国文化体験などの課外活動が実施された。参加学生は各自目標を持って研修に参加したが、それぞれが概ね目標を達成し、また、研修に対する全体的評価も高かった。参加学生は、特に西江大学での研修において、韓国語学習について非常に高く評価していた。この研修を経て学生が得たコンピテンシーとして、異文化（韓国文化）に対する興味の深化と学習意欲の高まり、積極性や行動力の向上、また中・長期海外留学に挑戦したいという気持ちなどが挙げられており、参加者たちはアウェーで実力を発揮するための素地を得たといえる。

## 4. 授業の提供

留学生・海外留学相談部門が担当した学部生向けの国際教育関連授業は表8の通りである（大学院生向けの授業については日本語教育部門の報告を参照）。

表8 国際教育関連授業の実施状況

1. 国際交流科目

科目名 (担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
異文化体験ゼミナール (阿部)	2コマ /週	交流学生	講義や体験学習、見学などを通して日本社会の理解を深め、あわせて日本文化への適応スキルを習得した。	夏学期・ 冬学期開講 各 60 時間

2. 全学共通教育科目

科目名 (担当者)	コマ数	対象	授業内容	時期・時間数
海外留学と国際教育交流 (阿部、太田、渡部)	1コマ /週	学部学生	海外留学を希望する学生を対象にマクロな視点から留学を考えるとともに、海外留学に伴う生活や異文化適応、留学とキャリアについて自らの考えを深めた。	夏学期開講 30 時間
留学生理解と国際教育交流 (渡部・太田・新見)	1コマ /週	学部学生	グローバル化する社会における国際教育交流のあり方、特に“Internationalization at Home”に焦点をあて、大学において異なる文化背景を持つ者の間で交流また協働を促進する課題と方法を議論し、考察した。	夏学期開講 30 時間
海外留学スキル・トレーニング (奇、秋庭)	1コマ /週	学部学生	海外留学で必要になる異文化コミュニケーション・スキルを、グループワーク、ディスカッション、ケーススタディなどを通じて体系的に習得した。	冬学期開講 30 時間
短期海外研修 (豪州・モナシュ大学) (新見)	1コマ /週	学部学生 大学院生	研修前の授業において、モナシュ大学のスタッフや、前年度研修参加者、交換留学経験者等を招いたり、危機管理ケーススタディを行った。	冬学期開講 30 時間
短期海外研修 (中国・北京大学) (奇)	1コマ /週	学部学生 大学院生	事前オリエンテーションでは、中国人留学生との交流、異文化に関する講義、また研修と各自の課題プロジェクトの準備を行なった。	冬学期開講 30 時間
短期海外研修 (スペイン企業派遣) (阿部)	1コマ /週	学部学生 大学院生	マドリッドに拠点を置く総合商社ベルヘ社と一橋大学との共同運営による企業実習(英語)で、ビジネスを文化体験を味わった。	冬学期開講 30 時間
短期海外研修 (韓国・西江大学) (渡部)	1コマ /週	学部学生 大学院生	研修前の授業では、1) 韓国社会の理解、2) 異文化コミュニケーションの基本的知識の習得、3) 研修成果をまとめる報告書作成の準備を学習目標とし、現地での研修に備えた。	冬学期開講 30 時間

(文責、集計：阿部 仁／編集：奇 春花・新見 有紀子・渡部 由紀)